

令和元年6月27日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05151

研究課題名(和文) 海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の解明

研究課題名(英文) Elucidation of receptor reality of the ancient Japan of overseas Dunhuang written Yi-Six Dynasties Sekitoku literature

研究代表者

西 一夫 (Nishi, Kazuo)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：20422701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：4年の研究期間において、国内はもとより台湾・フランス・イギリスでの敦煌書儀の実見調査を実施できた。これによって、デジタル画像による閲覧では不明瞭であった文字認定や紙継ぎ状況を明確に把握できた。また、従来書儀と考えられながらも不明な点が存した文献についても、その表現箇所の特定をできたことは海外調査での大きな成果である。

上記の海外調査の成果を受けて、注釈的研究では、メールなどを活用して原稿の検討を行い、1次原稿については、ほぼ全体の注釈を終えることができた。これらの注釈原稿を引き続き精度を高めて出版を目指して原稿の作成を進める。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第1の成果としては、デジタルアーカイブされたデータでは発見できなかった敦煌写本の調査ができたことが挙げられる。しかも3カ国での調査によって、不鮮明な文書の調査が実現し、翻刻文字を修正できたことは大きな成果である。第2に海外文献調査によって、注釈作業において、従来用例に恵まれなかった表現への例示ができたことである。これによって書簡語彙としての性格付けに一定の見通しをつけられた点が上げられる。第3として注釈的研究の意義を研究発表や学術論文、さらには報告書・著書として公開できた点である。これによって一定の社会的貢献を果たしたと言える。

研究成果の概要(英文)： During the four-year study period, we were able to carry out practical surveys of Taiwan, France and England as well as Taiwan. As a result, it was possible to clearly grasp the character recognition and paper feeding situation which were unclear in browsing by digital image. In addition, for documents that were thought to be conventional writing but for which there was an unknown point, being able to identify the location of the expression is a major achievement in overseas surveys.

Based on the results of the above-mentioned overseas surveys, in the annotative research, we examined manuscripts using e-mail etc. and were able to finish almost all the annotations on the primary manuscript. We will continue to improve the accuracy of these annotations and prepare them for publication.

研究分野：日本文学

キーワード：敦煌文書 漢文書簡 書儀 尺牘

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

敦煌文書が 1900 年に発見されてすでに百年が経過した。各国に分蔵されてきた大量の文書群は、個別での研究から、マイクロフィルムと影印本の刊行等により国際的な広がりを持って「敦煌学」と称して東洋学の重要な領域として位置付けられてきた。その中心は敦煌文書の文献学的研究にあり、しかも仏典・行政文書が研究の中心であった。このような状況において制度史・史的研究の観点から書儀に着目する研究が表れる(那波利貞『元和新定書儀』と杜有晋の編する『吉凶書儀』とに就いて、1962)。従来は制度史等の補助資料として利用されるのみであった書儀の研究が本格化して東アジアを中心に研究成果が公刊されて敦煌書儀研究の蓄積が進行(中国：趙和平『敦煌写本書儀研究』1993、周一良・趙和平『唐五代書儀研究』1995、日本：山本孝子『僧尼書儀に関する二、三の問題』2011 等多数)している。これらの成果は断片文書の綴合による新たな書儀の発見(蔡淵迪『俄藏本索靖《月儀帖》之綴合之研究』2011、丸山裕美子『ロシア科学アカデミー東洋写本研究部所蔵「索靖月儀帖」断簡についての基礎的考察』2013 等)、さらには書儀の表現研究(張小豔『敦煌書儀語言研究』2007、山本孝子『敦煌書儀の言語表現に反映される社会環境』2011 等)も深化している。このような書儀研究の国際的深化からすれば、さらなる断片文書の発見が期待される。だが陸続と刊行される影印資料のみでは解像度の問題から詳細な検討が不十分であり、実見調査の必要性が生じる。また国内でも調査が不十分な文献が存在する。そうした国内外の敦煌文献調査を書儀表現受容の観点から捉えることが可能な状況にある。

また六朝尺牘も書儀研究に類似しており、王羲之の尺牘が新たに発見(福田哲之『吐魯番出土文書に見られる王羲之習書』1998、王羲之『大報帖』個人蔵 2013)されると共に六朝文人の尺牘を表現学・語学・歴史学の観点からの注釈(『法帖体系淨化閣帖』1980 - 『王羲之全書翰』1987 等)が出現しており尺牘研究の新たな段階にある。

2. 研究の目的

本研究課題は、現在日本・中国・台湾・イギリス・フランス・ロシア等に散在する敦煌文献、なかでも書儀・尺牘断片を中心に据えた実見調査を通して新たな資料を発掘し、日本への受容や伝搬の実態を把握し、マクロ的に統合することを第 1 の目的とする。その上で正倉院蔵『杜家立成雜書要略』に焦点を絞り、当該書の注釈作業を通して、わが国における敦煌書儀・六朝尺牘の受容をミクロ的にも研究することで、表記・語法・歴史環境分野のさらなる研究推進をはかる。

そこで本研究課題では具体的に次の 4 点を明らかにする。

- (1) 海外に散在する資料の実見調査と関連資料の収集をおこない分析する(海外調査)
- (2) 書儀・尺牘表現を受容史・語学・史学(制度史)の各観点から分析をおこない、書儀・尺牘表現の特質を明らかにする(受容研究・語学研究・史学研究)
- (3) 書儀本文の特色を、各テキストの関係性と書体分析とから明らかにし、テキストとしての書儀本文の書体傾向の把握と系統の分析をおこなう(書体研究・諸本研究)

上記の各成果を踏まえて、新たな書儀・尺牘の本文紹介と調査・研究成果とを、正倉院蔵『杜家立成雜書要略』の注釈作業として集約する

3. 研究の方法

以下の方法で研究課題の目的を解明する。

1. 海外敦煌書儀・尺牘文献の発見と調査分析

台湾・イギリス・フランス・ロシアでの調査を実施して断片文書の同定をおこなう。また、国内調査とあわせて新たな書儀・尺牘文書を公開して書儀・尺牘研究を推進する。

2. 敦煌書儀・六朝尺牘の表現特質の解明

敦煌書儀研究は本文校訂や社会制度史に主眼があり、表現研究が未成熟状況は否めない。これを解決するために、これまでの研究成果と学際的視点によって表現の特質を明らかにする。

3. 敦煌書儀・六朝尺牘の受容実態と表現特質解明の成果を『杜家立成雜書要略』注釈に集約

以上のような基礎作業を踏まえて、敦煌書儀・六朝尺牘表現の分析結果を『杜家立成雜書要略』の注釈として集約し、内化・深化の受容実態を解明する。

4. 研究成果

本研究課題では、ヨーロッパを中心とする文献調査(英国 3 回、仏国 1 回、台湾 3 回)を通してデジタル画像では観察不能な文書の特質を明らかにし、書体・表記の多様性や書式・語彙の検討をおこない、注釈の特色として原稿化を進めた。

以上のような書儀・尺牘研究と正倉院文書研究の蓄積は、書儀・尺牘の受容が奈良・平安初期の漢文書簡においていかなる展開をなしているかを定位することと関連する。つまり表現の史的展開を跡づけ、文学・語学・文献学・歴史学等による学際的複合研究は、書儀・尺牘研究に新たな視点を提供することになる。さらに近年加速的に公開が進む東アジア(中国・台湾)の文献調

査を加えて『杜家立成雑書要略』の注釈として集約し、質的充実を図ることは、文献学・歴史学・和漢比較文学等の学際領域において以下のような波及効果が期待できる。

- 1 研究課題の成果を活用した書儀・尺牘研究の推進を実現できた
- 2 国外文献の調査と意義づけにとどまらず、受容研究の史的展開を具体的に示した
- 3 和漢比較の文学的展望に立った通史的な受容実態の在りようを拓いた

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- 西一夫、『杜家立成雑書要略』の基礎的性格 敦煌書儀の形式・表現・配列の分析を通して
、国語と国文学、93巻11号、57-77、2016、査読有
- 桑原祐子、正倉院文書における文末の「者」、正倉院文書の歴史学・国語学的研究、和泉書院、111-156、2016、査読有
- 小林比出代、「杜家立成雑書要略」第一紙の書法分析 「楽毅論」との比較から
、信州大学教育学部研究論集、10巻、1-20、2017、査読有
- 西一夫、教材としての古今集歌 韻文教材の価値
、信大国語教育、27号1-8、2017、査読無
- 西一夫・鎌倉大和、教材として『伊勢物語』を読む 「芥川」(第6段)を読む
、人文科教育研究、44号、43-58、2017、査読有
- 西一夫、学習の系統性を意識した古典作品の教材研究 『竹取物語』を素材として
、日本語と日本文学、63号、31-42、2018、査読有

〔学会発表〕(計6件)

- 西一夫、『杜家立成雑書要略』の書儀的性格 本文・表現・受容の観点から
、第34回和漢比較文学学会大会(関西大学)、2015
- 西一夫、正倉院蔵『杜家立成雑書要略』本文の配列 敦煌書儀との比較
、第25回信州大学国語教育学会(信州大学)、2015
- 西一夫、書儀表現の類型と汎用 『杜家立成雑書要略』と敦煌書儀との比較
、平成29年度美夫君志会全国大会(中京大学)、2017
- 西一夫、『杜家立成雑書要略』の宴席関連文例の特質、第70回萬葉学会全国大会(広島さん太ホール)、2017
- 西一夫、『杜家立成雑書要略』の臥病関連文例の特質、第37回和漢比較文学学会大会(帝塚山学院大学)、2018
- 西一夫、空海書簡の表現 独創と汎用
、第41回筑波大学日本語日本文学会大会(筑波大学)、2018

〔図書〕(計4件)

- 西一夫(他5名)、奈良女子大学古代学学術研究センター、漢字文化の受容 東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式 (報告書)、2017、90頁
- 奥村和美(他4名)、奈良女子大学古代学学術研究センター、漢字文化の受容 手紙を学ぶ、手紙に学ぶ (報告書)、2018、70頁
- 白井伊津子(他4名)、奈良女子大学古代学・聖地学研究センター、仮名文字 万葉仮名と平仮名 (報告書)、2019、98頁
- 奥田俊博(他8名)、三省堂、万葉仮名と平仮名 その連続・不連続
、2018、239頁

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：小林 比出代

ローマ字氏名：kobayashi hideyo

所属研究機関名：信州大学

部局名：学術研究院教育学系

職名：教授

研究者番号(8桁)：10631187

(1)研究分担者

研究分担者氏名：奥田 俊博

ローマ字氏名：okuda toshihiro

所属研究機関名：九州女子大学

部局名：人間科学部

職名：教授
研究者番号（8桁）：30343685

(1)研究分担者
研究分担者氏名：白井 伊津子
ローマ字氏名：shirai istuko
所属研究機関名：淑徳大学
部局名：総合福祉学部

職名：教授
研究者番号（8桁）：40323224

(1)研究分担者
研究分担者氏名：佐野 宏
ローマ字氏名：sano hiroschi
所属研究機関名：京都大学
部局名：人間・環境学研究科

職名：准教授
研究者番号（8桁）：50352224

(1)研究分担者
研究分担者氏名：奥村 和美
ローマ字氏名：okumura kazumi
所属研究機関名：奈良女子大学
部局名：人文学系

職名：教授
研究者番号（8桁）：80329903

(1)研究分担者
研究分担者氏名：桑原 祐子
ローマ字氏名：kuwabara yuuko
所属研究機関名：奈良学園大学
部局名：人間教育学部

職名：教授
研究者番号（8桁）：90423243

(2)研究協力者
研究協力者氏名：田中 大士
ローマ字氏名：tanaka hiroschi

研究協力者氏名：丸山 裕美子
ローマ字氏名：maruyama yumiko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。